

知的障害教育における 「主体的・対話的で深い学び」



子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようになるためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であり、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である「**主体的・対話的で深い学び**」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）を推進することが求められている。

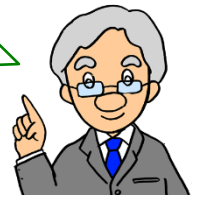
< 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編（平成30年3月） >

平成31年2月

岡山県総合教育センター

<はじめに>

新学習指導要領に「主体的・対話的で深い学び」というキーワードが出てきましたね。これは、小学校、中学校、高等学校等においても示されています。まずは、【児童生徒の姿】【教師の関わり】という視点から、それぞれの学びについて押さえておきましょう。



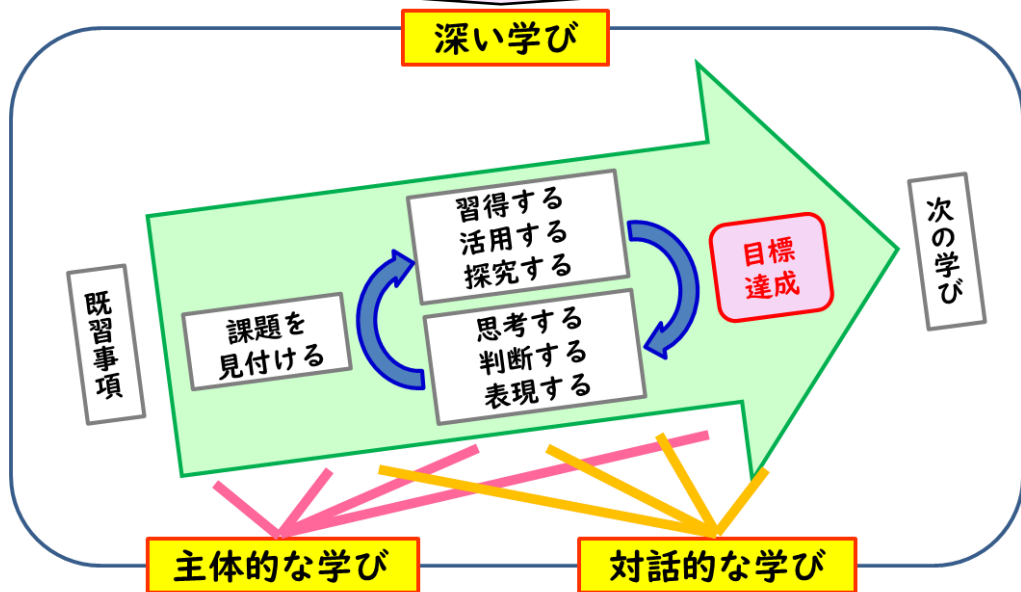
主体的・対話的で深い学びとは？

【児童生徒の姿】

◇各教科等の「見方・考え方」を働かせて、知識を関連付けたり、思考・判断・表現したりする

【教師の関わり】

◆各教科等の目標や内容を三つの資質・能力の観点から明確にする



【児童生徒の姿】

- ◇見通しをもつ
- ◇振り返って次へつなげる

【教師の関わり】

- ◆興味・関心を生かす
- ◆課題を意識付ける

【児童生徒の姿】

- ◇自分の考えを広げ深める

【教師の関わり】

- ◆教材・教具や言葉掛けの工夫により思考を促す

<参考：次世代型教育推進センター資料>

「三つの資質・能力」って何？

- ・生きて働く「知識・技能」
- ・未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」
- ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」

「見方・考え方」って何？

- ・「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科ならではの物事を捉える視点や考え方
- ・各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものとして、教科等の教育と社会をつなぐもの



知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、知的障害のある児童生徒の学習上の特性や知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本について押さえておくことも欠かせません。特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（以下「各教科等編」という）には、次のように示されています。



知的障害のある児童生徒の学習上の特性

- 学習によって得た**知識や技能が断片的になりやすく**実際の生活の場で生かすことが難しい。
- 成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む**意欲が十分に育っていない**ことが多い。

知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本

（各教科等編より一部引用）

- **日常生活、社会生活、職業生活に生きる力**が身に付くようにする。
- 日課や**学習環境などを分かりやすく**する。
- **実際的な状況下**で指導する。
- 一人一人が集団における役割が得られるようにする。
- **満足感、達成感、充実感、自己肯定感**が得られるようにする。
- 個々の児童生徒の**興味や関心、得意な面**に着目して教材・教具を工夫する。



この学習上の特性を踏まえた授業づくりに関しては、これまでも実際の生活の場を活用したり、継続的、段階的な指導をしたり、細かく称賛したりするなどの指導・支援をしてきているので、決して新しいことではないですね。

そうですね。これまで行ってきた知的障害のある児童生徒に対する指導・支援は、「主体的・対話的で深い学び」を実現する際にも生かすことができると考えています。



知的障害のある児童生徒が、自立と社会参加に向け、「生きて働く力」を付けていくために、ここまでの内容を含めた次に示す研究経過を経て、「学びを深めるための7つのポイント（単元構想）」を導き出しました。

- 新学習指導要領に関する情報の精査
- 文献研究
- 研究協力校・研究協力委員の授業実践



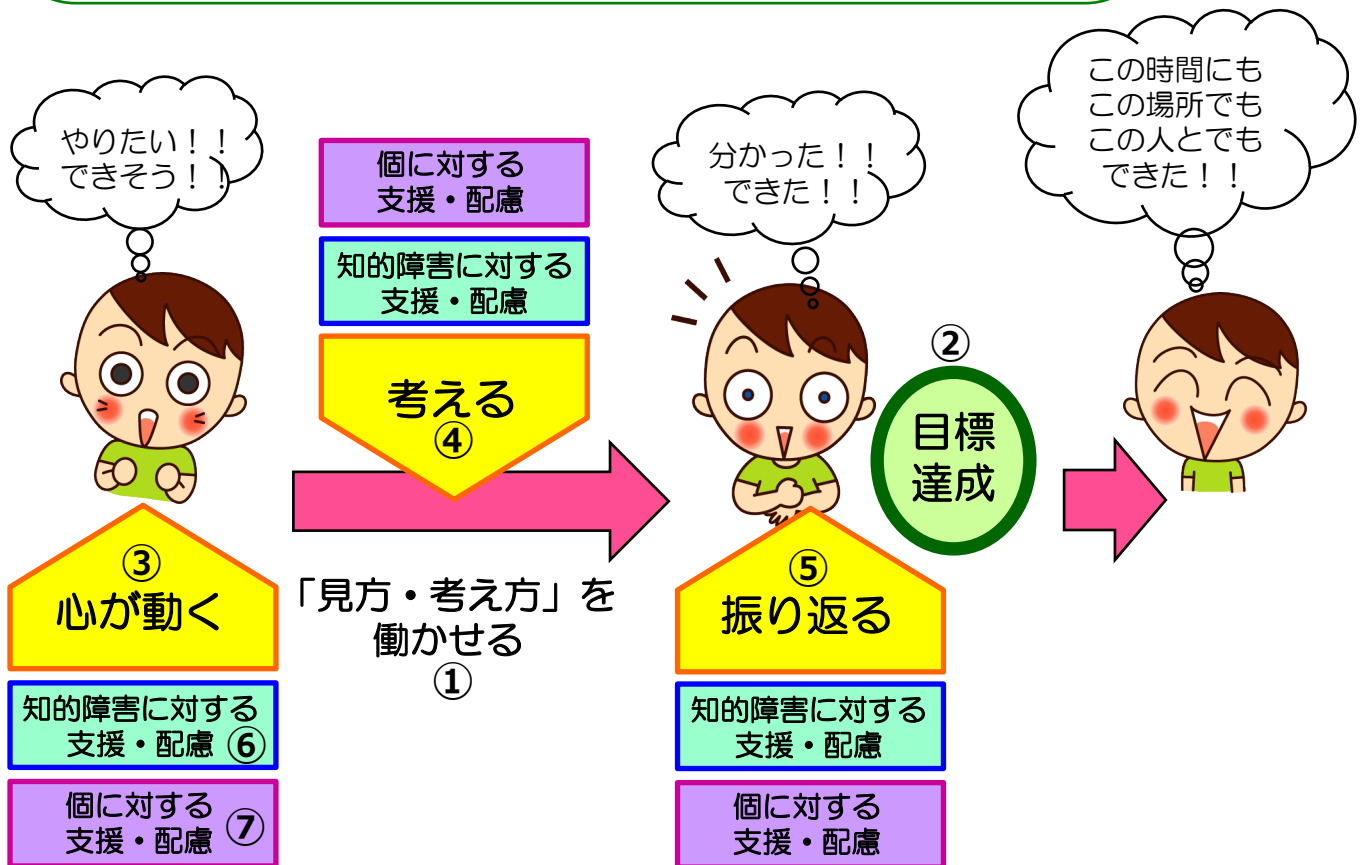
学びを深めるための7つのポイント（単元構想）

- ① 教科等の「見方・考え方」を確認する
- ② 適切な目標を設定する
- ③ 心が動く工夫をする
- ④ 考える工夫をする
- ⑤ 振り返る工夫をする
- ⑥ 知的障害に対する支援・配慮をする
- ⑦ 個に対する支援・配慮をする

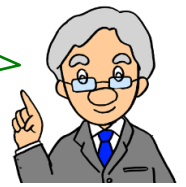
受け身の授業にしないためには、やってみないと「心が動く」ための動機付けや知的障害のある児童生徒にも実態に応じた「考える」機会が必要です。教師が支援をしすぎることによって考えなくてもできる授業にならないように気を付けましょう。心を動かして、自分で考えて感じられた「できた、分かった」学びは、児童生徒の生きて働く力となります。「できた、分かった」という自分の学びを「振り返る」ことも学びを深めるために必要です。

また、例えば、話し合う力や道徳的な思いやりのみを育てる話し合い活動にならないように、各教科等の「目標」や「見方・考え方」を押さえておきましょう。目標が高すぎても低すぎても児童生徒が学びに向かいにくいこと、個に応じた支援・配慮を考えておくことも、改めて押さえておきたいことです。

この7つのポイントを児童生徒の視点からイメージ化したのが、次の図です。

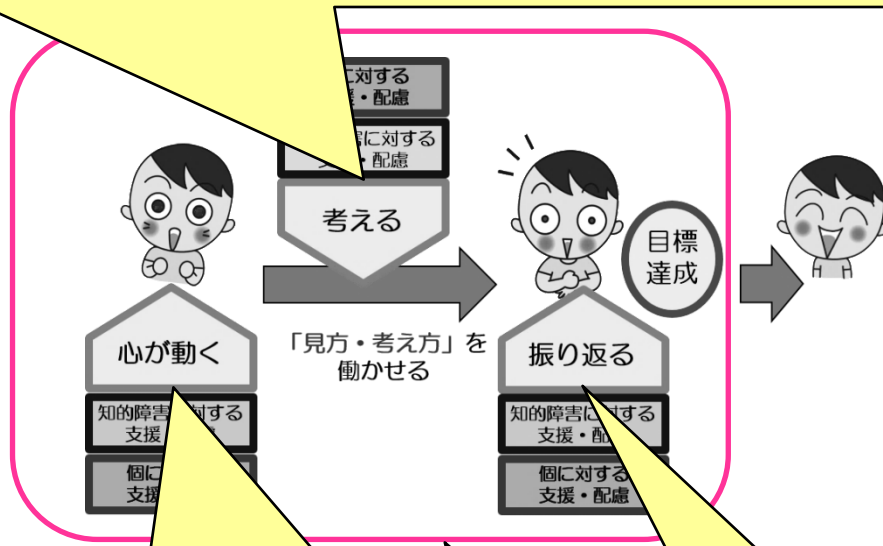


次の図は、これから紹介する四つの実践事例の中で取り組んだ知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための工夫を「学びを深めるための7つのポイント（単元構想）」に位置付けたものです。



知的障害教育における主体的・対話的で深い学びを実現するための工夫

- ◆ 児童の思いを尊重した合意形成 (実践事例①)
- ◆ 話し合いにおける思考ツールの活用 (実践事例②)
- ◆ 話し合いにおける視点の明確化 (実践事例③)
- ◆ 自分の考えをもつための体験活動の工夫 (実践事例④)
- ◆ 話し合いを深めるための支援の工夫 (実践事例④)
- ◆ 課題状況における支援の工夫 (実践事例①)
- ◆ 生徒同士で確認し合う場の設定 (実践事例③)
- ◆ 考えを深めるための授業展開の工夫 (実践事例④)



- ◆ 見通しをもつための工夫 (実践事例①)
- ◆ 興味・関心を生かした動機付けの工夫 (実践事例①②③)
- ◆ 「何のため」が分かる導入の工夫 (実践事例②③)
- ◆ 必然性のある課題の設定 (実践事例③)

- ◆ 振り返りの場面の設定 (実践事例①)

- ◆ 児童の思考に沿った単元計画の柔軟な変更 (実践事例①)
- ◆ 考えるために知識・技能を先行学習する単元計画の改善 (実践事例②)
- ◆ 課題意識の持続を意識した単元計画の改善 (実践事例③)
- ◆ 学んだことを活用する場面の設定 (実践事例①②)

それでは、実際に知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業改善をどのように進めていけば良いのか、四つの実践事例を通して、一緒に考えていきましょう。

今回、特に注目したのは、授業改善を進めるプロセスの中で、教師が考えたり気付いたりしたことです。それらを「教師の思考」として示すことで、授業改善に取り組む際に、大切にすべきポイントが得られるのではないかと考えました。



実践事例① 小学部・生活単元学習「3くみらんどをつくろう」



「主体的・対話的で深い学び」と聞いて、どのような授業改善を考えましたか？

児童の**興味・関心のある内容を題材**として取り上げ、「**やりたい**」気持ちを形にしなが単元を展開していくことで、児童がより主体的に活動できるのではないかと考えました。



<児童の実態>

- 小学部第5、6学年 6名
- 説明、教師や友達の様子を手掛かりにして活動内容を理解し、活動に取り組んでいる。
- 選択肢から選んだり、教師とやり取りをしたりすることを通して、自分の考えや気持ちを伝えようとする。

<単元目標>

- 教師や友達と一緒に3くみらんどを完成させるための計画や準備をしたり、道具や材料を使って遊ぶ物を作ったりすることができる。
(知識及び技能)
- 教師や友達とやり取りをしたり、友達の様子を参考にしたりして、遊ぶ物や楽しめる工夫を考えることができる。(思考力・判断力・表現力等)
- 3くみらんどを作ることを楽しみながら、友達と一緒に最後まで活動することができる。
(学びに向かう力、人間性等)

<教師の思考>

単元目標を考える際に、6名の児童それぞれの「主体的な学びの姿」「対話的な学びの姿」を頭に思い浮かべました。

大まかな単元計画は考えていましたが、児童の「やりたい」「やってみたい」という気持ちを大切に、**児童の思考に沿って単元計画を柔軟に変更**していこうと考えました。

児童の「やりたい」気持ちが続くように、夏休みの思い出をきっかけにして、**興味・関心に沿った遊ぶ物**を作ることを題材として設定しました。

これまでの経験や身に付けた知識・技能を基にしながら、活動が広がっていくといいなと思いました。

<単元計画> 全13時間

- 第一次
- 第1時 何を作るか相談しよう
 - 第2時 材料を考えよう、分担を決めよう
- 第二次
- 第1～4時 分担して遊ぶ物を作ろう
 - 第5時 3組のみんなで遊んでみよう
- 第三次
- 第1時 誰を招待するか相談しよう
 - 第2時 招待状を書こう
- 第四次
- 第1時 いよいよオープン、準備をしよう
 - 第2・3時 みんなを招待しよう
- 第五次
- 第1時 お礼状を書こう

<主体的・対話的で深い学びの工夫>

- ◆見通しをもつための工夫
- 振返りの場面の設定



児童が活動の**見通しをもてるようにする**ために、カレンダーの計画表を活用しました。いつ完成させるのか、完成までにどのくらい時間があるのかを伝え、必要な活動(準備、作る、遊ぶ等)をメモした紙をカレンダーに貼りながら、**児童と一緒に計画を立てて**いきました。

授業の**振り返りでは、カレンダーを見ながら、活動の進捗状況や新たにやってみたいことを児童と出し合**いました。自分たちのやりたいことを中心に単元が進んでいくので、次の時間を楽しみにしている様子が見られました。

また、「やりたい」気持ちが続くように、この期間は、毎日活動に取り組みました。



☆カレンダーの活用

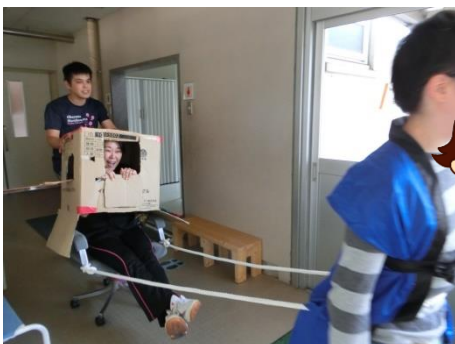
☆次時にやりたいことの確認

◆児童の思いを尊重した合意形成 (第一次第1時)



- ☆ミニホワイトボードの活用
- ☆児童が納得する提案

◆課題状況における支援の工夫 (第二次第3時)



- ☆動画によるイメージづくり
- ☆思考を促す教師の言葉掛け

◆学んだことを活用する場面の設定 (第四次)



- ☆お客を招待したくなる単元の流れ

「〇〇を作りたい」「〇〇をしたい」という児童の発言をボードに書いて貼っていきました。「この中からみんなですることを決めよう」と投げ掛けると、児童は顔写真を貼ったり、言葉で話したりして、自分の思いを表現することができました。そして、徐々に内容が絞られていったのですが、どうしても虫の公園を作りたい児童がいました。そこで、「虫の公園は、図工の学習で作ろうね」と言葉を掛けると、多数決の案を受け入れることができました。

主体的な学びに導くためには、**児童の思いを尊重した対応**が重要であると改めて気付きました。

児童の思考の幅が狭いと感じていたので、テーマパークの動画を視聴しました。すると、児童は作りたいもののイメージを膨らませ、必要な材料や作り方を自分で考えることができました。

トロッコを作りたい児童が、段ボールにコマを付けたのですが、人が乗ると重くて進まないという**課題に直面しました**。私が案を出すのは簡単ですが、単元目標にあるように、自分なりに遊ぶ物を工夫してほしいと考えました。そこで、「何かコマが付いていて進む物があるかなあ」と**思考を促す言葉掛け**をすると、児童は教室の回転椅子を見つけてきて、それに段ボールをかぶせてトロッコ作りに取り掛かり始めました。

自分たちが作った物で、**満足するまで遊び込んだことで、下級生や小学部の先生方を招待したいという声が児童から出てきました**。

招待する機会を設定したことで、次のような新たな課題が出てきました。

- ・誰を呼ぶのか
- ・招待状をどうするのか
- ・遊ぶ物をより良くしたい など

課題が出てきたことで、考える機会も増えました。「お客さんを招待したい」という気持ちが原動力となり、休憩時間にも教室の飾りを作る姿も見られました。

実際にお客さんを招待した際には、お客さんに遊び方を説明したり、尋ねられたことに答えたりするなど、これまでの学習を生かす姿が見られました。

最後の振り返りで、「お客さんに喜んでもらえて嬉しかった」と笑顔で話す児童の姿が印象的でした。

児童が活動内容や自分の役割を理解すること、教師が楽しい気持ちをつなぐこと、これまでの経験を生かす場を設定することなどを工夫して、児童の「やりたい」を形にすることができた実践事例でした。

学習指導要領に『各教科等を合わせた指導を行う場合においても、**各教科等の目標を達成していく**ことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要である』と記載されていることも、併せて確認しておきましょう。



実践事例② 中学部・保健体育科「ワンベースキックボールをしよう」



「主体的・対話的で深い学び」と聞いて、どのような授業改善を考えましたか？

主体的な学びについては、これまでも意識して授業づくりに取り組んできました。対話的な学びについては、話し合いというイメージがあります。深い学びについては、正直よく分かりませんでした。

まず、1学期の水泳の単元では、より長く泳ぐために話し合う活動を取り入れましたが、生徒から「何を話すのか分からない」という声が上がりました。そこで、**水泳の特性に基づいたチェックポイント**を確認しました。生徒同士で泳ぎを見合うことで、生徒Aが生徒Bに泳ぎの良いところを伝えたり、生徒Bと同じように泳ごうとしたりする姿が見られました。



<生徒の実態>

- ・小学部3段階から中学部2段階
- ・今までにティーボールの経験がある。体育の中で話し合った経験は、ほとんどない。

<単元目標>

- ワンベースキックボールの楽しさや喜びを味わい、簡単なルールを理解してゲームを行うことができる。
(知識及び技能)
- ワンベースキックボールについて、自分やチームの課題を見付け、その解決のために友達と考えたり、工夫したりすることができる。
(思考力・判断力・表現力等)
- ワンベースキックボールに自ら取り組み、ルールを守り、友達と関わりながら体を動かすことができる。
(学びに向かう力、人間性等)

<教師の思考>

単元を考える際には、**運動の特性**を大切にしました。ワンベースキックボールの特性には、

- ・攻防の楽しさがある
- ・一つ一つのプレーに集中しやすい
- ・協力してプレーしやすい

などがあると考えました。



3年間で様々な運動に触れる必要性や生徒の意欲の持続期間、思考する時間の確保などを考慮して、単元の時数を10時間に設定しました。

<単元計画> 全10時間

次	時	主な学習活動	知	思	主
一	1	ワンベースキックボールってどんなスポーツ？ ボールを狙ったところに蹴ろう	○		○
	2	ボールを遠くに蹴ろう	○		
	3	ボールをとって、狙ったところに投げよう	○		
	4	蹴ったら走ろう 試合の仕方を知ろう	○		
二	1	チームで話し合って練習しよう		○	
	2 3	ゲームをしよう		○	
三	1	チームで話し合って練習しよう		○	○
	2	ゲームをしよう		○	○
	3	ゲームをして、ワンベースキックボールを振り返ろう		○	○

第二次の話し合いにおいて、生徒の**思考を深めるためには、まず、知識・技能の確実な習得**が必要であると考え、第一次にボールを蹴ったり、投げたりする学習活動を取り入れました。

また、第二次、第三次は、第一次で習得した知識・技能を活用できる場として、ゲームを中心に計画しました。**繰り返しの中で、知識・技能がより定着し、学びが深まる**のではないかと考えました。



<主体的・対話的で深い学びの工夫>

◆興味・関心を生かした動機付けの工夫（第一次第1時）



☆ゲストティーチャーの登場
☆教師出演の動画の視聴

◆話し合いにおける思考ツールの活用（第二次第1時）



☆ミニホワイトボードの活用

◆学んだことを活用する場面の設定（第三次第2時）



☆話し合いとゲームを交互に行う展開

深い学びのために、**三つの資質・能力を育む順序を考えた単元計画の改善や運動の特性に触れる工夫**に重点を置いた実践事例でした。今後は、単元の時数が増えすぎないように、内容の精選も考えていきたいものです。



<教師の思考>

単元の導入で、生徒が「やってみたい」と心を動かすためには、**本物に触れる**ことも必要であると考え、**ゲストティーチャー**を登場させました。また、特性に触れるためには、「蹴る」「投げる」「捕る」「走る」という四つの技が必要であることを動画で伝えました。動画を見た生徒からは、「空いているところに蹴るのは、ティーボールと同じだ」と、**既習事項と結び付ける**発言も出てきました。



水泳の授業の話し合い活動の反省を踏まえて、ミニホワイトボード上で、名前カードを操作しながら**「守備位置」や「蹴る方向」という視点**で話し合いができるように工夫しました。生徒からは「ここに蹴った方が良い」「ここを守った方が良い」などの発言が出ていました。

しかし、生徒に「何のために話し合いをしているの？」と問うと、返事が返ってきませんでした。ゲームに勝つための戦略について話し合っているということを意識させることができていなかったのです。**課題意識をもった話し合い**にすることの大切さを実感しました。

また、授業後に「話し合いを頑張った」と言う生徒がいました。**話し合うこと自体が目的とならないように、体育の見方・考え方を働かせて活動に取り組む大切さ**に改めて気付きました。



これまでは「頑張れ」「いいぞ」という応援でしたが、この単元では「もっと遠くに蹴って」「空いているところをねらって」などの応援に変わっていききました。教師集団の言葉掛けも「よくできたぞ」などでしたが、**「上手に空いているところをねらったね」などの言葉掛けに変えた**ことが、生徒の変容につながったのではないかと思います。今、振り返ると、**「何でその方向に蹴ったの？」と、問い掛ける**ことで、ワンバースキックボールの特性に、生徒たち自身で気付くことができたのかもしれない。

「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善をした結果、生徒たちから次のような声を聞くことができました。



- ボールを蹴ったら、すぐに走ることができるようになった。
- 何を頑張るのかをみんなで考えることができた。
- チームのみんなで上手になって、もっとやってみたいと思った。



実践事例③ 高等部・作業学習「空き缶のリサイクルをしよう」



「主体的・対話的で深い学び」と聞いて、どのような授業改善を考えましたか？

生徒たちは、黙々と作業活動に取り組んでいるけれど、やり甲斐を感じているのか疑問に感じていました。そこで、**働く意欲や喜びをより育むことができるように動機付けの工夫や話し合い活動の設定**などに取り組んでみようと考えました。



<生徒の実態>

- ・環境・リサイクル班：高等部 第1～3学年 19名
- ・空き缶のリサイクルの工程を七つに分け、それぞれの工程を班で分担している。自分の役割を理解し、黙々と作業に取り組む姿が見られる。

<単元目標>

- 空き缶のリサイクルの流れや自分の役割について理解することができる。
(知識及び技能)
- 空き缶のリサイクル活動に取り組む中で出てきた課題の解決に向けて、自分たちで考えたり工夫したりすることができる。
(思考力・判断力・表現力等)
- 目標達成に向けて協力しながら空き缶のリサイクル活動に取り組むことができる。
(学びに向かう力、人間性等)



<教師の思考>

適切な目標を設定するというポイントを考える際に、そもそも作業学習において、生徒たちが考えるべきことは何だろうと、改めて単元目標を見直してみました。その結果、生徒たちが、それぞれに目標をもち、それを達成するための工夫について考えることが、**将来の生活につながる**のではないかと考えました。

<単元計画> 全33時間

- 第一次 リサイクル活動について知ろう
 - 第1時 リサイクルについて知る
 - 第2時 目標を決める
 - 第3～17時 目標を意識しながら作業に取り組む
- 第二次 空き缶を集めよう
 - 第1時 空き缶の回収方法を考える
 - 第2～7時 空き缶回収BOXの作成
 - 第8～11時 空き缶回収CMの作成
 - 第12時 回収BOXと回収CMの披露
- 第三次 1年間の成果を見てみよう
 - 第1時 1年間の作業を振り返る
 - 第2・3時 空き缶を業者に渡す
 - 第4時 成果(対価)の確認



リサイクル活動は、他の作業種のように製品の完成や販売会などははっきりとした終わりが無いから働く意欲がもちにくいのではないかと考え、**単元を課題ごとに短いスパンで区切る**ことにしました。

<主体的・対話的で深い学びの工夫>

- ◆「何のため」が分かる導入の工夫(第一次第1時)



☆空き缶のリサイクルの映像の活用
☆リサイクルの流れ図の提示、掲示



生徒たちの作業活動が、空き缶のリサイクルの工程のどの部分を担い、社会にどのように役立っているのかという**リサイクルの意義を知る**ことで、主体的に活動に取り組めるようになるのではないかと考えました。

この単元中に、突然来られたお客さんに、左の図を指しながらリサイクルについて説明する生徒の姿も見られましたが、**リサイクルという概念が大きすぎて、自分の活動とうまく結び付いていない生徒もいました。**

しかし、自分の活動が次の工程につながっていることは分かっている、次の工程の人のために丁寧に作業しようとする姿は見られたので、「**何のため**」に**学ぶのか**という意義は、**一人一人の実態に応じて違って良いのではないかと**思いました。

◆生徒同士で確認し合う場の設定（第一次第15時）



☆下級生が上級生に自分の仕事の出来具合のチェックを依頼

最初は、洗った空き缶の水が切れているかどうかをリーダーと一緒にチェックして、判断の基準を確認しました。その後、「切れていると思う？」と、リーダーに先に判断するように言葉を掛け、判断の擦り合わせを行いました。最終的には、**生徒に任せる**というスモールステップを踏んだことで、リーダーが自信をもって判断できるようになりました。この活動により、**リーダーとしての責任感**や下級生からの**リーダーに対する憧れ**が育ちつつあるように感じています。

また、この場で自分の学びを「振り返る」工夫ができるのではないかと考え中です。

◆興味・関心を生かした動機付けの工夫（第二次第1時）

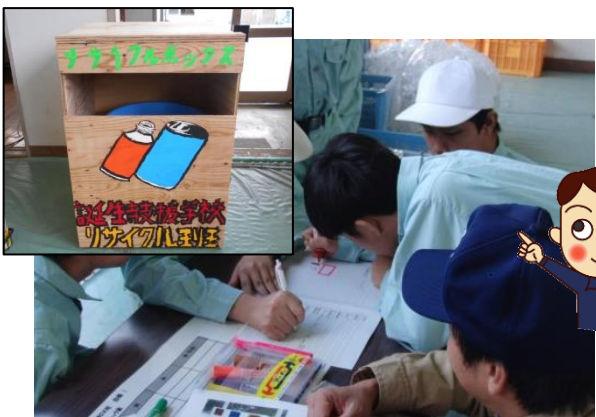


☆地域の方からの「ありがとう」のビデオレター
☆「絆まつり」におけるリサイクルのCM放映

自分たちの作業活動が**身近な人の役にも立っている**ことを改めて感じてほしいと考え、よく知っている地域の方からの感謝の言葉をビデオレターにして、授業の導入で流しました。生徒たちは、食い入るように画面を見つめていました。

しかし、高まった活動意欲を持続させるのは、難しいことでした。ビデオレターを見た後に感想を聞くなど、人の役に立っていることを確認し合える時間が取れると、より学びが深められたのではないかと考えています。

◆話し合いにおける視点の明確化（第二次第2時）



☆回収BOXの視点を示したワークシート
☆リサイクルBOXの写真資料の提示
☆「何のため」「なぜ」を問う教師の言葉掛け

空き缶が少なくなってきたので、どうしたら良いのかを生徒たちに投げ掛けました。**自分たちの作業活動に大きく関わる課題**なので、解決に向けて意欲的に思考したり、協力したりできるのではないかと考えました。生徒たちからは、これまでの経験を基に、回収BOXの製作、空き缶拾いなどの案が出ました。

どのような回収BOXを作るのかという話し合い活動では、その手掛かりになるように、**リサイクルBOXの写真資料、視点を示したワークシート**を準備しました。意見が拡散しすぎる際には、「**何のために作るの？**」と問い掛け、話し合いの方向性を再確認できるようにしました。生徒が自由に発想しつつ、考えを広げ深めていくためには、**新たな視点を示すタイミングも重要**であると思いました。



「何のために」作業学習に取り組んでいるのか、作業活動を**「通して」**生徒にどのような力を付けたいのかを問い直しながら授業改善を行った実践事例でした。

この授業改善により、特に生徒たちの思考力・判断力・表現力等が育ちつつあります。生徒自身が課題を発見し、課題解決のために思考する筋道を大切にした指導・支援を行った成果であると思います。

次時への意欲や達成感をより感じられる振り返りにすることが、次のテーマです。

実践事例④ 高等部・社会科「交通系ICカードのメリット・デメリットを考えよう」



「主体的・対話的で深い学び」と聞いて、どのような授業改善を考えましたか？

前単元では、定期券のメリット・デメリットについて考えました。しかし、必要な知識を教師主導で伝える展開となったため、うまくいきませんでした。そこで、今回は、**自分の考えを深められる話し合い活動**になるように学習活動や授業展開の改善に取り組んでみようと考えました。



<生徒の実態>

- ・中学部2段階から高等部1段階
- ・物事を一面的に捉え、良し悪しを考えて判断することが難しい生徒が多い。

<単元目標>

- 利用方法等を調べることを通して、交通系ICカードについての理解を深めることができる。(知識及び技能)
- メリット・デメリットを基にして、交通系ICカードの利用の有無について考えることができる。(思考力・判断力・表現力等)
- 交通系ICカードに関心をもち、自分の生活と関連付けながら、自ら調べたり話し合ったりすることができる。(学びに向かう力、人間性等)

<教師の思考>

深い学びに導くためには、まず、**社会科の見方・考え方を働かせる**が必要があると考えました。社会科の見方・考え方を働かせるとは、**視点や方法を使って考えたり、調べたり、学んだことを社会生活に生かしたりすること**等とありました。そこで、交通系ICカードを教材として、メリット・デメリットという視点に基づいて、根拠をもって利用の有無について判断する学習に取り組むことにしました。



<単元計画> 全5時間

第一次

- 第1・2時 岡山県で利用可能な駅を調べよう
- 第3・4時 利用方法を調べよう

第二次

- 第1時 自分にとっての使用の有無を考えよう

今すぐに交通系ICカードを利用する生徒ばかりではないかもしれないけれど、卒業後に交通系ICカードを使うことで、外出を楽しむなどの余暇の広がりにもつながるといいなと考えました。



<主体的・対話的で深い学びの工夫>

◆考えを深めるための授業展開の工夫 (第一次第2時)



生徒A：カッコいいから使いたい。
教師：先生の家の近くの駅は使えないな。
生徒B：僕の家近くの駅も使えないし、カードが使える都会に行かないから使わない。
生徒A：確かに。僕も休みは家にいるから、交通系ICカードはいらなかもな。

これまでの話し合いは、「教え合う」ことを中心としていたので、考えを広げたり深めたりするには、どうしたら良いのか悩みました。結論として、

- ・ **自分の考えをもつ**ために、知識を教え込むのではなく、生徒が自分で調べて知識を得ること
- ・ 多面的な視点から物事を判断するためには、**まずは一つの視点から**物事を判断する力を付けること

の二点が大切ではないかと考えました。そのために、交通系ICカードが利用可能な駅を調べる学習や交通系ICカードの利用の有無を話し合う学習を取り入れました。促進役として話し合い活動に加わる際は、「**生活と関連付けて発言すること**」を意識しました。

- ☆自分の生活と関連付けた調べ学習
- ☆一つの視点に絞った話し合い活動

◆自分の考えをもつための体験活動の工夫
(第二次第3時)



☆切符と交通系ICカードを利用する体験
☆タブレット端末、画像、模型の活用



教材・教具は「知識を教える」ための物だと思っていましたが、「**考えたり、判断したりする際の材料としての知識を得る**」ための物でもあると考えるようになりました。

切符と交通系ICカードを利用する体験ができる教材・教具を工夫することで、生徒たちは「お釣りが無いのは面倒くさくない」「時間がかからない」など、実感を伴って交通系ICカードのメリットに気付くことができました。

利用可能な駅が限られるというデメリットに意識が傾いていた生徒の思考に対して、切符より利用しやすいというメリットを体験として実感することで、交通系ICカードの利用の有無の**判断が揺れる**ことを期待しました。

◆話し合いを深めるための支援の工夫 (第二次第1時)



僕は、電車に乗ることがほとんどないから、交通系ICカードはいらないと思っていました。

でも、調べていくうちに、有効期限がないことやチャージができることを知って、使いたくなってきました。



判断が揺れた生徒たちは、その思考を話し合い活動に持ち込めます。ここで重要なのが、教師の役割です。これまででは、生徒が発言するためのヒントを与えていましたが、生徒が考えを広げたり深めたりするための役割は何だろうと、改めて教師集団で考えました。

その結果、「**生徒と違う視点から発言をすること**」「自分の生活と関連付けて発言をすること」の二点を確認しました。

ある**視点から物事を判断する力をモールステップで育てていった**ことで、複数の視点から判断したり、左の吹き出しのように、交通系ICカードと自分の生活とを関連付けて考えを変容させたりする姿も見られました。

しかし、交通系ICカードのイメージがもちにくく、学びが深まりにくかった生徒もいました。現在の自分の生活と交通系ICカードとを関連付けて考えることが難しかったのかもしれない。

☆話し合いに参加する教師の支援の工夫



社会科の見方・考え方を働かせながら思考することを大切にして授業づくりが行われた実践事例でした。生徒たちが、どのような「視点」から「何を」考えることができれば良いのかを具体的に想定しておくことが大切です。

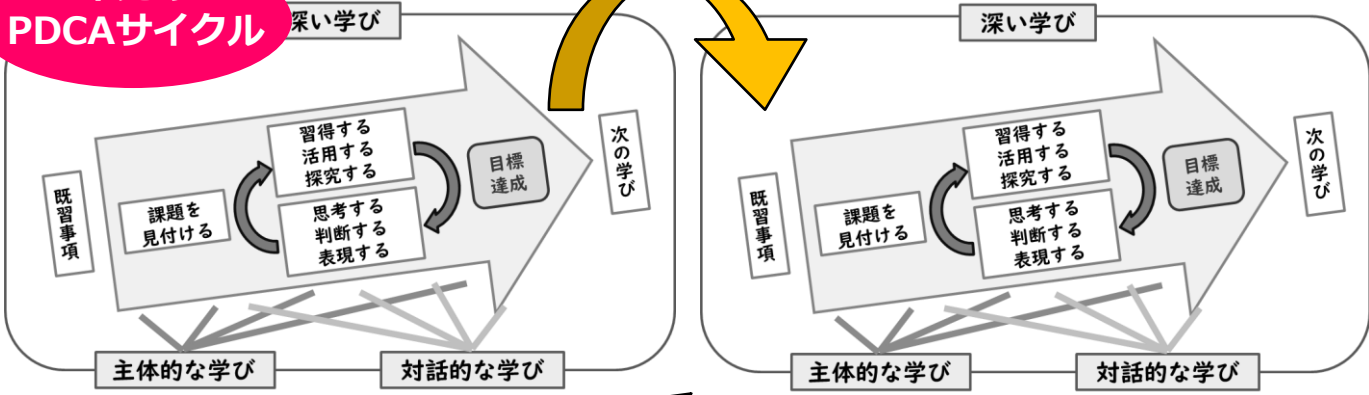
より実感を伴って交通系ICカードの利用の有無について判断するためには、校外学習などで実際に使ってみることまでを単元計画に取り入れ、**経験を加えた上で**、さらに判断していくことも有効ではないかと考えます。

<まとめ>

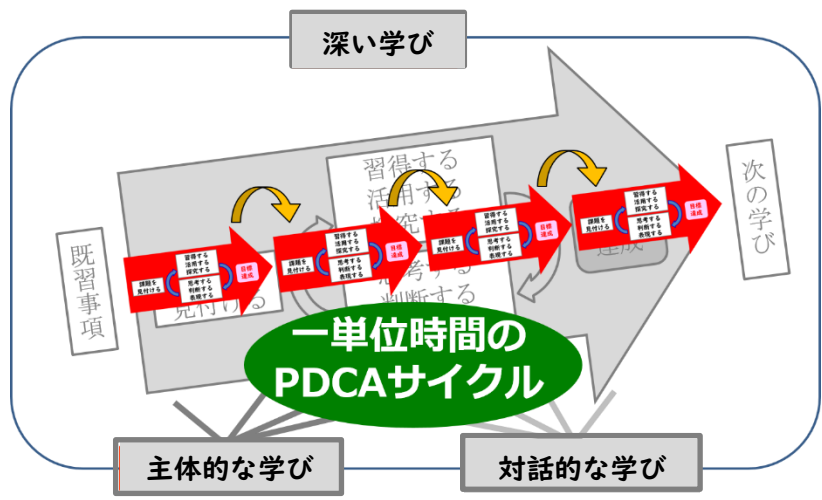
四つの実践事例を通して、知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためには、単元のPDCAサイクル、一単位時間のPDCAサイクルのそれぞれにおいて大切な点があることが分かりました。



単元のPDCAサイクル



- ★ 「学びを深めるための7つのポイント（単元構想）」を取り入れた単元計画を立てる。
- ★ 児童生徒の思考に沿って計画を立てる。



※ 赤い矢印は、一単位時間の授業の流れ

- ★ 三つの資質・能力の目標と照らし合わせて、児童生徒の深い学びの姿を見取る。

知的障害のある児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、それを実現できるよう計画を立てることも大切ですし、計画したことを実践していく中で、児童生徒の学びの姿を見取って適宜改善していくことも大切です。どちらが欠けても「主体的・対話的で深い学び」にはなりません。

実践場面においては、児童生徒が計画段階では想定していなかった姿を見ることが、しばしばあります。その児童生徒の姿は、目標達成に向かっていのか、その姿に至った教師の指導・支援は何だったのかなどを検討して、計画を柔軟に変更しながら、深い学びに至るように改善していくことが大切です。



児童生徒の「思考に沿って」計画を立てるとは？

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた【単元のPDCAサイクルにおける大切な点】として、「児童生徒の思考に沿って計画を立てる」ことを挙げています。これは、どういうことなのかを確認しておきたいと思います。

例えば、7つのポイントの「③考える工夫をする」手立てとして、話し合い活動を設定したとします。しかし、設定してみたものの、その話し合い活動において「考えてみましょう」と投げ掛ける、考えが出なければ教師が教えるという計画しか立てていなければ、当然のことながら児童生徒の考えは広がりも深まりもしません。

下の図の例のように、その話し合い活動において、児童生徒がどのような思考をたどるのかを想定し、それに対応した教師の支援を詳細に計画しておくことが大切です。



[例]



【児童生徒の思考】

これまでの学習や経験から、こうしてみたらどうかな？

自分で考えるだけでは分からなくなってきたな…

新たな考えを思いついた！
そういう考え方もあるんだ！

こうしたら解決すると思う！

学習課題



課題解決

既習事項や経験を想起できる工夫をしよう！

新たな情報を提示しよう！
・タイミング
・方法
・内容
・量

仲間同士で試行錯誤する時間を確保しよう！

新たな視点を提示しよう！
・タイミング
・方法



児童生徒の思考を
しっかり想定して！

【教師の支援】

このように児童生徒の思考に沿って詳細に計画を練っておくこと、そして実践場面において児童生徒が活動したり、発言したりしている姿からその思考を見取りながら、計画した支援の適切性を判断し、必要に応じて修正していくことが、「深い学び」につながっていくのです。



このブックレットを読んで、授業改善に対する自分自身の学びも深まってきた気がします。これまでの実践を基に、「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点も取り入れながら、子供たちがより生き生きと学ぶことができるように、授業の質を上げていきたいと思ひます。



【参考文献・参考資料】

- ・田中博之（2016）『アクティブ・ラーニング実践の手引きー各教科等で取り組む「主体的・協働的な学び」』教育開発研究所
- ・武富博文・松見和樹（2017）『知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング』東洋館出版社
- ・田村学（2018）『深い学び』東洋館出版社
- ・岡山県特別支援学校長会・岡山県教育庁特別支援教育課（2018）『授業づくりハンドブック～学習指導案と学習評価の考え方について～』

平成29・30年度岡山県総合教育センター所員研究

（共同研究；特別支援教育）

「知的障害教育における主体的・対話的で深い学びに関する研究」

研究委員会

指導助言者	川合 紀宗	広島大学大学院教育学研究科教授
協力委員	岡山県立誕生寺支援学校教諭	1名
	岡山県立西備支援学校教諭	1名
	岡山県健康の森学園支援学校教諭	1名
協力校	岡山大学教育学部附属特別支援学校	
研究委員	片岡 一公	岡山県総合教育センター特別支援教育部長（平成30年度）
	加藤 君子	岡山県総合教育センター特別支援教育部長（平成29年度）
	木下 聡子	岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事
	木村 文吾	岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事
	村上 直也	岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事（平成30年度）
	山根 亮	岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事
	仲 哲宏	岡山県総合教育センター特別支援教育部指導主事

平成31年2月発行
知的障害教育における「主体的・対話的で深い学び」

編集兼発行所 岡山県総合教育センター
〒716-1241 岡山県加賀郡吉備中央町吉川7545-11
TEL. (0866)56-9101 FAX (0866)56-9121
URL <http://www.edu-ctr.pref.okayama.jp/>
E-MAIL kyouikuse@pref.okayama.lg.jp